

地域の自治組織と経済活動の関係性



弘前大学 大学院地域社会研究科
副研究科長 教授 佐々木 純一郎

sasajun@hirosaki-u.ac.jp 2021年12月15日(水)

◎ 自己紹介

➤ 学会活動

- 日本経営学会理事・東北部会代表

➤ 主な社会活動

- NPOひろだいリサーチ附属 ひろだい地域商社研究会 会長
- 青森県商工会連合会「新規事業者デザイン支援事業」 専門家
- 青森県あおもり産品消費宣伝対策強化促進事業・推進委員会 委員
- 青森県地域経済研究会 構成員
- 青森県新型コロナウイルス感染症経済対策会議 委員
- 建設トッパーナー倶楽部 特別会員・幹事

主に地域と弘前大学とを結ぶ活動をしています。

◎概要

- 地域づくりと地域の経済活動とは、小規模な自治体を除いて、行政の担当部局が分かれていることも多く、一体として考える機会がなかった。
- しかし地域の自立には、地域の経済的自律の観点が必要である。
- 近年注目されている地域商社には、手作りの直売所から、道の駅、そして本格的な企業経営など、広範な対象が含まれる。
- この講義では地域自体が自前の経済活動に取り組んでいる事例を紹介し、地域の持続可能性を展望したい。

◎目 次

1. 地域経営の目的(経営理念と経営目標)
2. 地域主導の「ビジョンづくり」
3. 自治組織 共和の郷・おだ
4. (農)ライスフィールド(有)
5. 平内町藤沢地区の取り組み
6. むすびにかえて

1. 地域経営の目的（経営理念と経営目標）

(1) 経営理念

- ①経営者の信念/信条等 「地域の振興」。「安心・安全で住みやすい」
- ②経営理念に基づくイメージや行動様式の統一 地域ブランド確立へ
- ③事業領域(ドメイン) 農林水産物と顧客への癒しの時空間の提供等
- ④組織の構成員に共有される価値体系 地域の文化と風土

(2) 経営目標

- ①経済的目標 収益、雇用創出、納税等の指標
- ②社会的責任やイメージ向上 環境問題の対応など非経済的目標も必要
- ③利潤は地域ビジネスの存続・成長をカバーできなければならない
ビジネスを通じて地域自体の存続を目指す(ドラッカーの存続目標体系)

2. 地域主導の「ビジョンづくり」

(1) 地域を衰退に導いたこれまでのやり方・具体的な欠陥点

①主役(主体)が中央政府の役人になっている。

②政策の推進手段は補助金と低利融資(条件によっては無利子)。

③政策・事業を地域の現場に「下ろし」、推進・普及・勧誘にあたるのは、道府県の出先期間の職員たちである。

④地域の現場で、地域振興の事業を実施するのは、主として市町村である。

(2) 「本末転倒」な国の政策にふり回されないために、何をなすべきか
地域住民が主役となる「集落ビジョン運動」

〔出典〕楠本雅弘「国の政策にふり回されない地域主導の『ビジョンづくり』を」、原資料『現代農業』2015年7月号。農山漁村文化協会編(2017)『事例に学ぶこれからの集落営農』農山漁村文化協会

3. 自治組織 共和の郷・おだ(広島県東広島市河内町小田)

(1) 自治組織を基礎とした農事組合法人の設立

広島県東広島市河内町の中山間地の小田地区(215世帯、600人)では、平成の大合併による小学校廃校など、集落存亡の危機に瀕した。そこで地区の全住民が危機意識を共有し「地域をあげて取り組むことができるシステムづくり」を最重要課題と位置づけ、2003年に小さな役場=自治組織「共和の郷・おだ」を設立した(住民自治協議会)。自治組織の農村振興部が母体となり、2005年に小さな農協=農事組合法人「ファーム・おだ」を設立し、基幹産業である農業を主軸に、集落全体の活性化を図っている。自治組織が基礎となる地域営農の仕組みは「新二階建て方式」という(楠本雅弘『進化する集落営農』2010)。このように、最初に地域の合意形成により自治組織を立ち上げたことが契機となり、地域の多くの農家が参加する農事組合法人を立ち上げている。「新二階建て方式」とは、自治組織に、地域外からの移住者など農家以外の方々の参加が増加することに対応している。

*共和の郷・おだ <http://kyouwanosato-oda.com> 2018/2/23 閲覧

3. 自治組織 共和の郷・おだ(広島県東広島市河内町小田)

(1) 自治組織による「村の復活」

- ①2002年暮、小学校の廃校(2004年)などを契機に、住民運動が盛り上がる
- ② 2003年1-9月に33回の会合 アンケート、講演会・視察研修、役場・議会との意見交換
- ③2003年10月、「共和の郷・おだ」設立 120年前消滅した「小田村が自治組織として復活・再生した」
- ④「共和の郷・おだ」の工夫 組織自体が事業運営の主体(経営者)にならない。「ソフト」活動に徹する

(2) 集落営農法人による「農協の復活」

- ①2005年11月、「農業生産法人ファーム・おだ」設立 旧村(小学校区)全体をカバーする「農場」
- ②2006年、「ファーム・おだ加工グループ・ビーンズ」結成 目的はファーム・おだの加工品開発・販売

郷づくりを支える7本の柱

未来創生 77ビジョン

1 安心・安全な暮らし

- 1 安心・安全道路(歩道整備)
- 2 地域の拠点「おだ地域センター」太陽光自家発電
- 3 小田川ホテルの重
- 4 水辺公園

4 地域産業の振興

- 27 小田川の産物振興
- 28 地域の野菜・果物等産地
- 29 地元産食材の活用・レシピ研究
- 30 農業レストランレシビ開発
- 31 地域内外への魅力と情報発信
- 32 道のマスコット「家人」PR

5 自然環境の保全

- 33 ふるさとフルーツの産
- 34 パークゴルフ
- 35 青りんご産地にむいた産出
- 36 野外ステージ
- 37 山と川の活動体験ひろば整備
- 38 手作り「たぬき窯」窯物ピザ焼き体験
- 39 地元産材料理体験
- 40 ものづくり体験工房「丸太木工」「竹加工」「つる組み」
- 41 窯越え「窯屋」
- 42 ルアーフィッシング
- 43 地域センターのバリアフリー化
- 44 地域センター(元小学校)教室の複層階級化
- 45 多目的集会所のバリアフリー化
- 46 音楽イルミネーション散歩道

- 47 小田川ライトアップ
- 48 桜の里公園
- 49 小田川登山道
- 50 地域の花の里公園化
- 51 シバザクラ(餅餅)
- 52 小田川音楽祭
- 53 とんど祭り
- 54 田植え祭り

2 雇用の創出

- 5 「浮き床製造」大規模野菜ハウス
- 6 安全と美味しい農産物加工所
- 7 米粉ばい店「パン&マイム」
- 8 移動販売「パン&マイム号」

- 9 空き家の住居転換と活用
- 10 「家人の家」ファーマーズマーケット
- 11 「家人の家」農業レストラン
- 12 「家人の家」農家ワーク&ステイ

- 55 越前寮
- 56 炭焼き小屋
- 57 サイクリングステーション
- 58 バーベキューひろば
- 59 キャンプ広場
- 60 人気のパークゴルフ場整備拡大
- 61 道の入り口小田川村近大聖堂内看板

3 交通の便

- 13 「みんなのバス」運行
- 14 「福祉 CAR」ドア to ドア 送迎の便
- 15 地域内外への送迎(外出支援)
- 16 英語買い物代行

- 17 デイサービスセンター
- 18 診療所
- 19 訪問看護センター
- 20 地域センター導入路・駐車場整備

- 21 保育所
- 22 学習支援・託児所
- 23 小中学生の通学支援

- 24 災害時緊急地下倉庫
- 25 「ドライビングステーション」電報・ガソリンスタンド
- 26 防災センター

6 歴史文化の継承

- 62 道の民俗・文化資料館
- 63 史跡めぐりハイキングコース整備
- 64 サイクリングコース整備
- 65 休憩所・多目的トイレ設置
- 66 道の歴史マップ

7 自然環境の保全

- 67 農事組合法人「ファーム・おだ」の安定経営
- 68 きのことセンター
- 69 なたね油販売
- 70 除草ロボットの活用
- 71 太陽光発電シート(屋根)
- 72 農業のハイテク化
- 73 ゆずの産
- 74 山と水のグラウンドワーク
- 75 園芸の研究開発
- 76 道の道徳循環システムの確立
- 77 共創館



[出典] 共和の郷・おだ「未来創成77ビジョン」

4. 農業生産法人ライスフィールド株式会社(島根県松江市)

(2) 地域の農地を守る長期ビジョンを考える会社組織

農業生産法人ライスフィールド株式会社（1996年事業開始。2002年会社設立）は、島根県松江市近郊の平野部に位置し水稻の栽培・出荷販売等と無人ヘリ防除や農作業受託を事業内容とする。同社の経営理念は「農地の保全」（農地の維持と管理）、「最適な農業経営」（低コスト生産）そして「人とのつながり」（人に支えられてこそ経営は成り立つと考え、近隣集落の担い手と歩む）の三つである。2017年度、農地140haを借り受け、農家だけでなく、行政からの要請により耕作放棄地も借り受ける。10名の社員全員が正社員であり、幹部養成のための積極的な社員教育を実施し、社会保険や福利厚生も充実している。2018年春に農業大学校の新卒者2名が入社予定。平均年齢は30代。10年後の地域内での農地集積を展望し、農地の地代と賦課金が釣り合うような地域の長期ビジョンを考えている。このように、会社組織である同社が地域の10年後を展望したビジョンを構想している。同社があるからこそ、耕作放棄地を解消し、地域に若者の雇用を創出できているといえる。

*農林水産省「2010年度 全国優良経営体表彰・農林水産大臣賞受賞」

<http://www.maff.go.jp/j/press/keiei/keiei/101020.html> 2018/2/26 閲覧

【出典】 佐々木純一郎(2018)「農業の法人化と地域の持続可能性」、青森県『青森県社会経済白書(H29年度版)』

5. 平内町藤沢地区の取り組み(青森県平内町藤沢地区)

(1) 藤沢地区からの運動

①2014年8月、藤沢地区が青森県、平内町、弘前大学と現状を詳しく調べ、将来を考え、行動を目指して活動

② 藤沢が目指すのはこんな集落

- ・住民がいつまでも若々しく生き生きと光り輝ける、しごと・ゆとりを持ち、健康である集落
- ・皆で和気あいあいと楽しく、地域のつながりが絶えない集落
- ・地区の外の人にも魅力的で、新しい人やアイデアを受け入れる開かれた集落

③活動方心～活動をする上での心構え～

- ・やれる人たちが、やれることを、無理をせずに
- ・目の届く範囲の身近なものを活用して、いきがづくり
- ・多世代の人々が集まり、交流する機会を増やす
- ・藤沢にゆかりのある外の人との交流の機会を増やす、つながりを強くする

(2) 藤沢地区の具体的取り組み

①他地域との交流、視察受け入れ 青森県新郷村、岩手県、秋田県との交流

②2016年 国道4号線沿いのコンビニ脇に「直売所ふんちゃ」開設

【出典】土井良浩(2016)『いんでねえが ふんちゃ～青森県平内町藤沢地区 明日を切り拓く、一年間の試み

～ vol.2』藤沢町内会、弘前大学大学院地域社会研究科藤沢プロジェクトチーム

藤沢地区は平内町にある約 300 人 110 世帯の農業集落で、スーパー、病院が徒歩圏内にあり青森市内にも車で30分程度の距離に立地しています。コミュニティセンターを拠点として、町内会を中心に公民館、婦人会、子供会などの地域活動が盛んです。

青森県庁、平内町役場の協力を得ながら、地域社会研究科では教員、大学院生や研究科OBがワークショップ、現地調査や勉強会を実施するなど、藤沢地区の取り組みを4年間にわたって支援してきました。

1 年目 >> 地区の現状調査と将来イメージ・活動アイデアづくり

1年目は、まず、地区の資源や課題、住民の今後の居住意向などを調査しました。ヒアリングやワークショップにより、山菜などの自然の恵み、丘からの風景、神社・獅子舞などの歴史文化、優れた子育て環境、住民間交流などの資源と、人口減少、雇用の少なさ、農業後継者不足、耕作放棄地の増加、獅子舞後継者不在などの課題が明確になりました。また、先進地である新郷村川代地区などを視察し「自分達にもできる」と確信を得ることができました。以上の成果を住民集会で共有する機会をもった後、地区の将来像・今後の活動方針と活動内容を定め【表】、地区内外に取り組みを発信する小冊子もつくりました。

【表】藤沢で定められた地区の将来像・活動方針・活動内容

I. 将来像

- ①住民がいつまでも若々しく生き生きと光り輝ける、しごと・ゆとりを持ち、健康である集落
- ②皆で和気あいあいと楽しく、地域のつながりが絶えない集落
- ③地区の外の人にも魅力的で、新しい人やアイデアを受け入れる開かれた集落

II. 活動方針（活動の心構え）

- ①やれる人達が無理のないことをする
- ②目の届く範囲の身近なものを利用して、それをお小遣いに変える
- ③多世代の人々が集まり、交流する機会を増やす
- ④藤沢にゆかりのある外の人との交流の機会を増やす、つながりを強くする

III. 活動内容（すぐできる、やりたいもの）

- ①野菜や山菜等の無人販売所を設置する
- ②娯楽・交流のため「どっぶ引き」の復活
- ③休耕田・耕作放棄地にそばを栽培し、そば打ちを通じて交流する
- ④山菜や舞茸等を栽培して皆で食べる
- ⑤健康教室を実施する
- ⑥獅子舞の継承に取り組む



ワークショップ（今後の活動検討）



成果発表（新年会にて）

2年目以降 >> 活動の実施とその後方支援

2年目からは活動実行段階となり、研究科は進展状況を検証するワークショップや新たな活動立ち上げに向けた勉強会開催などの支援をしました。まず地区にも自生するハタケシメジのブランド化を目標に、県民局や県産業技術センターの助言を得ながら栽培・収穫し調理レシピの開発もしました。また、川代地区から苗を分けてもらったハックルベリーを休耕地で栽培・収穫してジャム作りを行い、川代で盛んなPPバンドカゴ作りの教室も始まりました。川代地区とは、祭りに応援参加するなど相互交流がスタートしました。さらに、サツマイモ掘りや親子クッキングなど子どもの体験機会をつくり、役場や病院の協力を得て生活習慣病や認知症予防などをテーマとする「健康教室」を実施しました。

3年目には、研究科OB及び大学院生が地元産農作物直売所の運営体制づくりを支援し国道沿いの空き倉庫を改装して「直売所ふんちゃ」をオープンさせ、獅子舞の存続に向けて囃子の楽譜作成や後継者育成のための練習会を実施しました。

4年目は、県内外の大学生を地区に迎え入れて地域づくりインターンシップ事業も実施しました。1年目の計画の大部分が実施・着手され、ハタケシメジ栽培や直売所の運営も軌道に乗りました。

今後は、地区の活動をどうやって次世代に繋いでゆくかを考える場を設ける予定です。



ハタケシメジブランド化の協力依頼



PPバンドカゴ作り教室



親子クッキング



「直売所ふんちゃ」オープン



横笛生演奏による獅子舞お披露目



地域づくりインターンシップ

2016/7/16、直売所オープン。2021年度、NPOひろだいいりサーチが支援。若い世代への承継が課題

6. むすびにかえて

(1) 地域経営の目的と地域ビジョン

- ①地域の住民が主体となり、地域の未来を考えることが出発点
- ②行政との関係性 補助金の活用は手段にすぎず、目的ではない

(2) 共和の郷・おだ

- ①自治組織による「村の復活」
- ②集落営農法人による「農協の復活」

(3) (農)ライスフィールド(有)

- ①会社組織による地域の展望
- ②若者の雇用は地域自体の持続可能性のために必要

(4) 藤沢地区

- ①無理のない活動
- ②学習と他地域との交流の重要性

ご清聴ありがとうございました



十三湖から望む岩木山。

[撮影 佐々木純一郎]